

都市貧困に関するシンポジウム 日本とフィリピンの現場から [報告書]

2007年7月18日
慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科修士課程
笠井賢紀

1 シンポジウム

1.1 基礎情報

当該シンポジウムは2007年6月18日(月)に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス棟17教室で開催された。講師の招聘に掛かる費用は慶應義塾大学湘南藤沢学会の「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」からの拠出を受けた。主催はSFC都市貧困研究会¹である。

1.2 背景と目的

近年、途上国と先進国の別を問わず貧困や格差の問題が注目され現に起こっている。とりわけ都市部には「都市下層」あるいは「都市貧困層」と呼ばれる社会的排除に遭った人々の層がいる。

日本においては1800年代末の「貧民窟調査」において、またアメリカのシカゴ学派が参与観察を中心としたフィールド・スタディにおいてすでに気づいていたように、都市貧困層の実態を捉えその動態を見るには現場に入り込むことが不可欠である。

湘南藤沢キャンパスにも「スラム」、「都市貧困」、「貧困」などをテーマとして勉強、研究、調査を行っている学生が多数おり、私たちは現場で調査する中で対象との距離をどのように取ったらいいのか、現場でどのように調査すればいいのか、文献調査など現場の外で何を行うのか、そして私たちに何

ができるのかということについてそれぞれに悩み考えていた。

本シンポジウムとそのための事前勉強会、事後反省会はこうした背景を抱える学生達が集まり、相談をするとともにまさに「現場」で活動や研究に長年従事する人たちを講師として迎えることでより有意義な研究への示唆を得ようというものである。

1.3 講師と講演内容

シンポジウムには講師を三名招いた。講演順に簡単な紹介と合わせて当日の講演内容を記す。

高沢幸男氏は横浜の寿町で15年以上野宿者支援活動に携わって来た方である。当日は日本において野宿者がどのように表象されているかを述べ、「野宿者は怠惰であり、怠惰だからこそ野宿者になった」などという短絡な発想を現場も見ずに考えないで欲しいということを参加者に訴えかけた。多くの最新のデータを用いて近年の日本における野宿者動向を示すとともに参加者に「ぜひこういった問題があるということを伝えるメッセージになってほしい」と参加者に呼びかけた。

オダリー・アディアオ＝ガルシア (Odalie Adiao-Garcia) 氏は1970年代から30余年に渡りフィリピンのマニラ首都圏ケソン市でコミュニティ・オーガナイザとして活動して来た方である。当日²は氏が長年にわたり携わってきたタタロン地区の土地所有権抗争について説明し³、世界観に関する参加者との簡単な交流を行った後に、日本とフィリピンの差について述べた。

青木秀男氏は数十年にわたり日本のドヤ、寄せ場やフィリピンのマニラ首都圏都市貧困層を中心に都市下層や都市貧困層について研究をして来た方である。当日は氏が昨年から半年にわたり調査を行ったマニラ首都圏の「ストリート・ホームレス」について述べ、近年マニラにおいてホームレスが急増しフィリピンの都市貧困層において注目すべき要素であるとして研究報告を行った。

なお三氏の内、二名がフィリピンのマニラ首都圏についての講演であり偏りがあるようにも思わ

¹代表は笠井賢紀。政策・メディア研究科プロジェクト科目「グローバル・ガバナンスとリージョナル・ストラテジー」および同大学「研究会A(山本純一)」のサブプロジェクトとして担当教員に申告の上、メンバーを募った。指導教員は山本純一環境情報学部教授。

²ガルシア氏の講演については笠井が逐次通訳を行った。

³なおこの説明は時間の関係で不十分だったために笠井が日本語で参加者に補足説明を行った。

れるが、青木氏は『現代日本の都市下層』という日本の問題について日本語、英語で記しており他の二名の講演を受けてまとめるのに適任であった。

また途上国だけ、先進国だけというシンポジウムにすることは本来の目的に合致しないため日本から僅か4時間の地理的位置を持ち、市民運動の盛んなフィリピンという日本とは状況がかなり異なる国の事例もぜひ参加者と話し合いたかったという意図がある。

各講演はおおよそ1時間ずつ行い、その後に質疑応答を行った。

1.4 参加者

当日は慶應義塾大学内外の大学教員、博士課程学生、修士課程学生、学部学生、NGOスタッフ、NGO学生ボランティアの計20名が参加した。約5時間のシンポジウムと、その後の懇親会まででおおよそ半日まるまるが費やされたが、参加者から感想を伝えるメールが届き、質疑応答も盛り上がるなど良好な反応だった。

2 事前勉強会(文献講読)

シンポジウムで講演を聴く前に関連する文献を読んでおくことが重要であろうという考えから、SFC都市貧困研究会のメンバーは以下の文献を読んだ。

- 倉沢愛子編著(2007)『都市下層の生活構造と移動ネットワーク』明石書店
- 青木秀男(2000)『現代日本の都市下層』明石書店
- ピエール・ブルデュー(1993)『資本主義のハビトゥス』藤原書店

倉沢の著書では中川清と青木秀男の論文により、日本における「貧困」概念の変遷と現在の日本の貧困状況について概観した。青木の著書では特に彼の「生活史法」に見られるような対象との研究者との関係について読みメンバーそれぞれの研究について話し合った。

ブルデューの著書は本シンポジウムの内容を考えるに、結果的にあまり適切では無かったと言えるが、より理論的・概念的な論考により人々の生活形態の変容について見た。

3 事後反省会

事後、三回のミーティングを行った。

一回目は青木講師との相談会であり6月19日に行った。これはシンポジウムを補完するものであり、SFC都市貧困研究会メンバーの具体的な研究についてアドバイスを得るものだった。

二回目はガルシア講師との相談会であり6月26日に行った。氏がなぜ活動に携わっているのか、フィリピンでは今ほかにどのような問題があるのかを話し合った。

三回目は夏休み以降今回のシンポジウムを活かしてどのような動きをしていくか話し合うもので7月3日に行った。このミーティングにより、秋学期以降もフィールド・スタディ、文献講読を続けていこうということになった。

4 参加者

- 指導教員
 - － 山本純一
- 講師
 - － 青木秀男、オダリー・アディアオ・ガルシア、高沢幸男
- SFC都市貧困研究会
 - － 伊藤裕一(博,GR)、内坂翼(修,HC)、笠井賢紀(修,GR)、風岡昌樹(学,山本研)、成瀬美悠子(学,井庭研)、若尾俊亮(学,梅垣研)
- 参加者
 - － 上記以外の10名